

本学の取組紹介

関田 一彦

学士課程教育機構 副機構長・初年次教育推進室長

司会：

高大接続を意識した本学の取り組みについて、本学、学士課程教育機構の関田副機構長から紹介していただきます。それでは副機構長、よろしくお願いします。

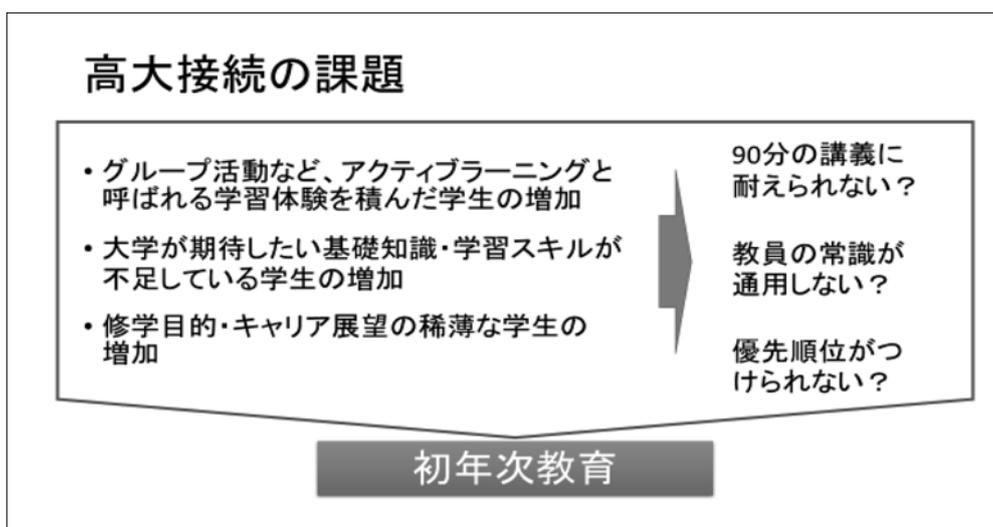
関田先生：

只今ご紹介いただきました学士課程教育機構の副機構長をしております、関田と申します。私は AP 事業の推進を担当しております関係もあり、昨年6月に設置された初年次教育推進室の室長も兼任しております。初年次教育推進室は、いわゆる高大接続の入口のところで、4年後の卒業という出口を見据えつつ、新入生が「生徒」から「学生」に変わるところをしっかりとサポートするための役目を担っております。そういったところで今日は、高大接続と本学の取り組みについて少しお話をさせていただこうと思っております。

高大接続には、様々な課題があります。今日お話いただいた工学院附属中学・高等学校の例に限らないと思います。本学の兄弟校であります東西の創価学園も様々な形で改善・改革を進めております。いずれ入ってくる学生が変わり始めます。もちろん変わらない学生もありますが、グループ活動など、いわゆるアクティブラーニングと呼ばれる学習体験を積んだ学生が間違いなく増えてきます。大学は、伝統的な授業をすればするほどアクティブラーニング慣れた学生とのズレが大きくなるかもしれません。

しかしながら一方で、大学が期待したい基礎知識や学習スキルが不足している学生もまた増えてくるかもしれません。先ほど市川先生が探究型の授業改善を追究した結果、結局わからないものが積み重なってしまう生徒が出てくるリスクについて話されましたが、様々な意味で基礎基本が十分身につけている学生は意外に少ない気がします。実際、既によほどトップの大学を進学先に選ばなければ、大学進学は多くの高校生にとって特別なことではなくなりました。有名な大学でも、たくさんの高校に推薦をうっていますので、早慶も含めて、推薦で入ってしまう学生はたくさんいます。その結果、とりあえず進学はしたものの、修学目的やキャリア展望が薄い学生も増えております。

アクティブラーニング慣れた学生は、90分ずっと教員の話聞き続ける授業には耐えられない。さらに、教員は当然知っていると思っている話をして、高校までの学びが偏っていてピンとこないような、基礎知識の乏しい学生も少なくない。あるいは「アルバイトと授業どっち優先なの？」と聞くと、「アルバイトは、1時間働くと1000円もらえる。授業1回2時間として、授業に行っても2000円もらえないけど、アルバイト行けば2000円稼げるからアルバイトに行く」と答える学生も多い。本学の場合、授業は5回まで休んでいい、と思っている学生も結構いる。そこで、「君たち学費を考えてごらん、1コマあたり3000円使ってるんだよ」って言うってみても、「やはりバイトでしょ」という



ことになる。要するに、自分がどうなりたいたのかがはっきりしないから、優先順位がばらばらになる。こういう状態の学生を、生徒から一人前の「学生」にしなくてはいけない。このように、高大接続を考えたときに、いろんな課題が間違いなくあります。文科省が初年次教育の充実を強調している理由がよく分かります。

このような初年次教育の課題を踏まえて、本学も様々な取り組みをしております。2018年、つまり来年から新カリが始まります。例えばその中で、共通科目として初年次セミナーを開講します。今まで学部ごとに行っていた専門科目としての基礎演習から、全学必修の共通科目という位置づけに変えることで、大学全体としてしっかりと1年生の大学適応を考えていこうとしています。

初年次教育とカリキュラム設計1

◆2018年度からの新カリにおける共通教育の工夫

1. 基礎科目群の整備
 - 専門科目「基礎演習」 → 共通科目「初年次セミナー」
 - 学部内に閉ざされた情報 科目担当者会を通じた情報の共有
2. 上級科目の開設
 - 汎用的能力の育成を視野に入れた授業(課題)設計
 - 200、300番台科目の新設
 - ← 汎用的能力の育成は初年次で終わらない

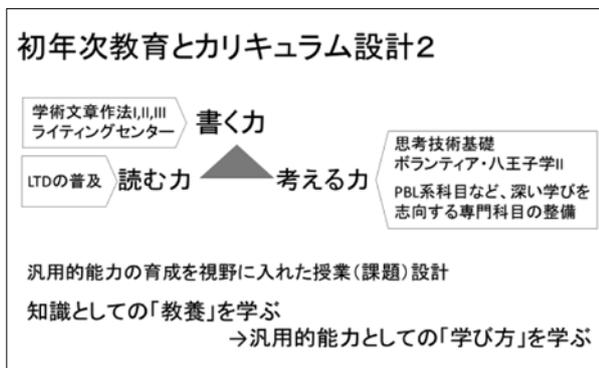
また、今まで共通科目というのは基礎的の学術技能、あるいは一般的な教養を学ぶものとして、1年生がはじめに学ぶ専門基礎科目と同じ100番台にナンバリングされることがほとんど

でした。ただ、学士課程4年間を通じて汎用的能力を伸ばすことが期待され、また、実際に伸長に複数学期が必要なことを考えると、1年生のときだけの、100番台のレベル内容だけでは必ずしも十分とは言い難いのが現状です。だとしたら、200番台の科目の中でもしっかりと汎用的能力を磨いていくことも必要だという認識が広がっています。汎用的能力の育成は初年次だけで終わらないのですから。これについては、私が所属する教育学部の例を後ほど簡単にご紹介したいと思います。

創価大学では、学士課程の4年間、学部教育と共通教育の垣根を越えて、様々な力をつけなければいけないという話の中で、当たり前ですが、書く力、読む力、考える力、いわゆる、大学で学問をしていく上で絶対に必要な3つの要素があるだろうと考えています。その中の、書く力については、1年生の必修科目として「学術文章作法I」を開講しています。この科目については、「創価大学さんは書く力の育成に頑張ってますね」ということで、昨年ちょうど読売新聞(2016年7月8日付朝刊)に取り上げてもらいました。それなりに世間では認知されるレベルのプログラムが走っています。

考える力には、様々なものがありますが、いわゆる知識としての教養を学ぶなかで考えることは当然として、汎用的能力としての学び方を学ぶような、初年次教育の趣旨に適った科目の

新設（たとえば科目名「思考技術基礎」）を新カリでは考えています。



ということで、書く力、考える力の次は、読む力の育成です。読む力についてはLTDという、しっかりと読んで理解して、ディスカッションで学びを深めていく学習法がありますが、そうした指導法を重用していきます。LTDに必要な力を今年から始めるAO入試でも評価しようということになりました。今でも様々な授業にLTDは取り入れられていますが、加えて、AO入試に取り入れるということで、今年はかなり多くの学部の方にも研修を受けてもらいました。これから授業に本格的に展開される先生が増えていくと思います。ということ、ちょっとここで看護学部の添田先生に、LTDを使ってみましたというプチ報告をしていただこうかなと思います。添田先生、お願いします。

添田先生：

看護学部の添田と申します。私は成人看護学（慢性期）領域の教員です。現在、主に慢性疾患の患者さんの看護を専門にする授業を担当しています。そこで、いろいろ課題があった中で、「LTD (Learning Through Discussion) 話し合い学習法」(以下、LTD) を導入してみたの手ごたえを感じておりますので、そのお話をさせていただきます。

2014年の後期から、「成人看護学慢性期援助論I」という授業を行っていますが、当初は伝統的な一方的な授業を行っていました。学生アンケートでは「非常によくわかった」「先生の

深い実践から話を聞くとすごくいい」というような結果があったのですが、試験で知識や理解を問うと授業の到達目標を達成していないことがわかりました。また、臨地実習で実際をみていくと、学生のコミュニケーションや、共に学びあうというスキルや態度が身についていないなど、様々な課題が明らかになってきました。そこで講義中心の授業に限界を感じ、個人で改善策を考えることや、慢性期の科目を担当する教員で会議を開いて検討するなど、試行錯誤をしていました。そんな時、本学のAP事業で行われている授業設計ワークショップや、アクティブラーニングの様々な研修を受ける中で、一筋の光がさしたような思いをしました。

2016年の7月に「同僚会議」という、本学の様々な学部の教員が集まって1つの問題を共に考える同僚会議に参加しました。その会議は、「質問」とそれに「答える」という形で進められる会議でそこで問題として提示されていたのが、LTDに関することでした。その問題を話し合っていく中で、その先生（問題提示者）が提示された問題を共に考える中で、それが自分自身の問題にも非常に当てはまってくるなと思いました。そしてLTDをやっていくと、今、私が感じている学生の様々な課題を解決していけるのではないかと思い、2016年の後期からこの方法を導入しました。

私自身がこの方法について熟練しているというわけではなかったのですが、後期からの授業だったため、授業前の1か月間必死に自己学習をし、教材の選択を行い、授業のイメージトレーニングをするなど、時間をかけて準備をし、導入しました。すると予想以上に、その授業中、学生が非常に楽しそうに集中して話し合っているなという印象がありました。その授業(LTD)の中に、「関連付け」というところがあるのですが、それを行っているあるグループが静かで、話し合いがうまくいっていないのではないかと思い、話しかけたところ「みんな考えているところ」「うまくいっているのに

それが何か？」と、集中しているところに話しかけられて迷惑というような、学生の冷たい視線を感じる状況にまでなっていました。「これは何か違うな」と思いました。さらに、毎回授業の度に、アンケートで学生の予習時間を聞いているのですが、平均4時間以上勉強していたということが判明し、さらに、授業後に提出されたポートフォリオから、LTDでの学生の学びと深まりが読み取れ、予想以上の手ごたえを感じました。さらに、学生へのアンケートをみていくと、「非常に能動的な授業だった」ということや、「自分で考える機会が多くて、達成感があった」等の評価がありました。

そして、2016年の後期の「成人看護慢性期援助論I」（講義科目）に続いて行う、2017年前期の「成人看護慢性期援助論II」（講義と演習科目）の授業では、LTDとPBLの問題解決型の授業の要素を合わせた授業設計を行い、学生と教員とで授業を発展させることができました。最終の授業アンケートで、この授業について「自分が他の授業と違うと感じたところはあったか」と尋ねると、84名のうち57名が回答し、その中の51名が「違うところがあった」と答えていました。

その中でいくつか代表的なものを紹介します。「予習をやりきってグループのメンバーと話し合いを深めるところが違った」「そのやり方をする事で自分の考えなどの学びがさらに深まった」「学生を信じて主体性を伸ばしてくれたところ」というように、教員のことを評価していることや、「アクティブラーニングで、みんなが能動的なグループワークだった」「看護師になるための総合的な力がついたと思うから」「例えば話し合う力、相手を尊重する力、文献を読む力、記録を書く力、そして学生主体で授業を進行するところ」「他の授業では、授業が先生から知識を教えてもらうが、この慢性の授業は自分たちで深めた」というような内容がありました。さらに、「LTDがメインであったことにより、自分以外の人からも知識を得る

ことができ、学びをより深められた点」という回答もありました。現在は、臨地実習に出て、私も今、毎日臨地で実習指導を行っているのですが、そこでこの授業で学生が身に付けたことや、学んだことがどのように生きてくるのかというところを評価し、継続して授業改善していきたいと思っているところです。

この授業を通して、私自身の教育観が変わり、授業観が変わったことで、授業そのものが大きく変わっていきました。そして、私自身の学生観も大きく変わり学生への信頼も深まりました。そして何よりも学生が活き活きと授業に参加しているということを感じることができることで、学生と教員が、ともに成長しているという実感が、今このLTDの導入を通して感じている手ごたえです。以上です。ありがとうございました。

関田先生：

添田先生ありがとうございます。添田先生の授業は2年生の授業です。添田先生ご自身、LTDの経験はなかったわけですが、手探りで準備してやってみたら、とても手応えがあった。きちんと学生たちが自分で予習してくるから、話し合いが深まる、深まるから面白くなる、自分で考える、そして自分たちで考えることにLTDの時間は開かれている。だからまた予習をしてくる。そうなる自然に3時間の予習時間が4時間になり5時間になる。別に勉強しろって言わなくても必要があれば学生は学びます、というような話でした。

ただLTDをたくさんやると当然困ることがあります。1つの授業ならいいですよ。1科目に5時間も予習が必要な科目が3つも同時にあったら学生死んじゃいますよね。当然、ほかの授業では寝てるとか、ほかの授業の最中にこっちの勉強してるとか、そういう話になるんです。授業改善に終始している従来型のFDだと、1つの授業が改善されれば、それで十分に「素晴らしい」という話ですけど、本学では、

そうした段階は終わっているのですが、どうしたらそういった素晴らしい授業をつなぎ合わせてきちんとカリキュラムとして回せるか、ということが課題となります。ということで、今年の「取組紹介」でも簡単に触れましたが、教育学部の取り組みを少しご紹介したいと思います。

教育学部には、児童教育学科と教育学科がありますけれども、特に児童教育に入ってくる学生は大半が入学時点で教職を、どこまで真剣かはわかりませんが、志望しています。良くも悪くも、かなりキャリアははっきりしているわけですが、全員が全員、教師になるわけではありません。しかも教育学部ではGPA3.0、つまり成績をBレベルにキープしないと教育実習にいきません、という関門がありますので、様々な理由でそれを超えられない学生が出てきます。そうすると、もともと教職をとるために作られているカリキュラムですから、その路線から離れた瞬間に、学部の科目で履修するものがなくなってしまう。営業マンになろうという学生が、音楽科教育法や算数科教育法を履修するわけですよ。自分に関係のなくなった教科内容の話がいっぱい出てくるわけです。もちろん教育学部に入った以上は学んでほしいこともあるわけですが、少なくとも学生側のモチベーションはかなり下がりますよね。実際、教育学部が用意している科目の中だけでは、こうした学生の多様なニーズに対応できないわけです。

教育学部の試み1

1. 共通科目の活用

- ・進路(教職)変更した瞬間、履修する科目の意味が薄れてしまう
- ・共通科目・自由選択科目の卒業単位枠を拡大 8→16→20
- ・学術文章作法II/III, 思考技術基礎の3科目のうち1科目を原則履修へ

2. 3単位科目の増設

旧カリ(4科目)	新カリ(6科目)
教育心理学I	教育哲学
発達心理学I	教育社会学
臨床心理学I	
教育方法学	
	+

そこで、だったら積極的に共通科目を使おうよ、共通科目って色んな授業があるじゃない、という話になります。前回のその前の2008年のカリキュラム改訂のときは他学部の開講科目や

共通科目の枠で卒業要件を満たす自由選択に数えられるのは8単位しかありませんでした。それを前回、2014年にカリキュラム改訂したときに16に倍増しました。そしてさらに2018年度、来年から始まるカリキュラムでは、20に増やしました。つまり学士課程としての教育です。学部の教育だけじゃなくて共通科目も一緒に使って学生を育てましょう、という発想です。そのためには、共通科目の側にも教育学部として伸ばしてほしいスキルをちゃんと伸ばしてくれる科目があることが前提になります。

例えば学術文章作法IIとか、あるいは新しいカリキュラムで開講される思考技術基礎です。教員になる上で書く力、考える力って絶対必要ですから、そういったものも共通科目で磨いてもらいたい。また、別に教師にならなくても就職するうえでも大事な能力だから、そのための科目は教職を志望しない学生にも有益だろう。共通科目も使いながら学生を育てようという発想に変えたんです。

さらに、教育学部の場合には、伝統的に1週間1回2単位の科目が多いんです。基本的に教員免許を取るためであれば2単位科目で済むのです。本当なら4単位でも足りない領域でも教職課程上は全部2単位で済むのです。こうなると、1週間1回2単位科目がたくさんできます。本当に、学生は日々ばらばらに、履修できる科目を手当たり次第にとっていきます。4年生で行う教育実習と同時並行であまり授業を取りたくない、という理由もあって、とにかく単位さえとれば教員免許が取れるってような状態になるわけです。けれど、入ってくる学生が多様化している中で、大学生として学ぶ準備が整っていない学生が週1回、10科目も詰め込んだら1週間後にどれだけ覚えているか、言わずもがなです。ということで、経済学部や経営学部のように先行している学部からすると「なにを今頃」、という話なのですが、教育学部でも、前回の2014年カリのときに、実は週2回の科目を作りました。他の学部では、週1回を2

回にしたので2単位+2単位で4単位としているのですが、教育学部は週2回で3単位の科目にしています。それを前回4科目作り、さらに新しく来年からは2科目追加して、全部で6科目になります。これは、単位の実質化とアクティブラーニングの充実を念頭に置いた対応です。

伝統的な週2回の授業っていうのは、今まで1週間に1回教えていたものが週2回になったから倍教えられる、ということで前期後期でカバーしていたものをぎゅっとまとめて全部やりましょうという発想があります。例えば教科書が上下巻あるものとか、分厚いものにも変わるかもしれません。学期に30回教えるわけですからカバーするのは当然倍ですね、ということです。ところが、教育学部では3単位にしましたので、回数は増えるけれども、使う教科書は別に倍にすることはないので。

そうではなくて、一つ一つの授業の全部をしっかりと関連付けてちゃんと予習させて復習して関連付けを徹底して、習得と活用、あるいは探究、こういったものをきちんと回していきましょう。そうすることによって、たくさんの知識をカバーするよりも、しっかり深く学んでもらしましょう。その方が力がつくだろうと考えたのです。そのための科目を前は4つ作りました。今回はさらに2つ作りました。全部で6つです。このように、きちんと学生を育てましょう。1年生の時の初年次教育でいろんなスキルを教えるはいるけれど、それを使いこなさなければスキルは身に付きませんから、週2回にすることでしっかりとやっていきましょうということを考えてきました。

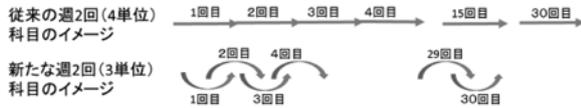
特に、私がこれからお話をする例は、私が担当している教育心理学Iという、ちょうど今年はこの月曜日が最後ですけれども、履修者70名ほどの授業です。この授業では、予習復習と関連付けを重視します。ちょっとまだデータとして出ていませんけど、学生に聞くとですね、この授業を履修して、とにかくはじめて関連付け

の意味が分かった。関連付けて学ぶからよく理解が深まる。ほかの授業でやってきたものも関連付けるから、他の授業が面白くなる、他の授業を聞きながら、今自分が学んでいること、これがどうつながるかわかる。考えながら学べる。学び方が少しずつ変わってきたというのです。

授業回数が増えた分、チャレンジングな課題も入れました。この授業では、いきなり教育心理学会の学会誌から、一人一本、気に入った論文を選ばせます。それを作者になったつもりで、ポスターセッション形式で発表してもらうのです。学生は当然、「この分析手法わかりません」って泣きついてきます。「教えていないのだから、分からなくていいんだ。何が仮説で、何が結果か分かればいいんだ。何のためにそれを調べたか分かればいいんだ。そしてそれをみんなに分かるように発表しろ」と、私は無茶を言います。「こんなの読めない」とかぶーぶー言いながらも学生たちは読んでくれます。なんとかポスターにまとめて説明しなければいけませんから、何度も読み返して理解しようとしています。こうして、グループの仲間の分も含め、なんだかんだで、学期に7本も8本も学術論文を見たり聞いたり話したりすることになります。ですから、始めるまでは難しそうと敬遠していた論文を読むのが怖くなくなります。これで3年生になった時に、ゼミに入って、必要があれば専門雑誌の論文も調べてみよう、という具合に研究的な姿勢が芽生えます。1年生のときに図書館で文献検索の仕方を習っても、実際に論文を読む機会がなければ忘れてしまいます。仮にあったとしても、気後れして手を伸ばさなければ論文検索の有用性に気づきません。

教育学部教育学科の試み1

教育心理学I: 2年生対象の前期、週2回3単位の選択必修科目(7~80名)



週1回(2単位)科目と同じ教科書を使い、アクティブラーニング型授業を通じ、予習・復習・関連付けを徹底し学術論文の活用

2年前期だからこそ、専門教育への導入を確かにしたい

論文内容自体が十分に理解ができたかどうかではなく、読み通す経験が大事だと思っています。読んだときに何が仮説かを掴めれば、難しい検証方法なんか分からなくても大きな問題ではありません。それは必要に応じて後から学べばいいんですから。実際、「教育学研究法」という授業もありますし、統計学などは共通科目でも学べます。ポイントは、2年生の前期、1年生で少しずつ身につけてきた高校までとは違う学び方をしっかりと打ち込むために、専門科目の導入期だからこそ、しっかりと週2回やりましょうというのがカリキュラムの編成方針で、私が担当している教育心理学Iを例に挙げましたが、週2回の3単位科目が他にも5つ用意されています。ほとんどが選択必修ですから、学生らは2年次から3年次に、どこかしらで必ず履修することになります。このように、間違いなく学生を育てるプログラムに変えました。週2回ですから、単純に考えて1科目で3時間4時間の授業外学習は大変かもしれないけれど、3単位分ですから、ちょうどいい具合に単位の実質化がされると思います。

時間が無くなってきました。少し先に行きますが、そういった形で教育心理学Iの場合には、前期3単位、週2回でした。でも後期の教育心理学IIは元に戻して、週1回2単位です。

ここで、特に意識しているのは、教えて考えさせるスタイルを徹底することです。まさに今日の講師である市川先生がお書きになった放送大学のテキスト『学力と学習支援の心理学』を使って、自分がやっている学び方はどうなの

教育学部教育学科の試み2

教育心理学II: 2年生対象の後期、週1回2単位の選択科目(3~40名)

学習心理学を「教えて考えさせる」スタイルで学ぶ

標準的な授業の流れ

1. 前時の学びをA4一枚にまとめてくる→相互確認
2. 予習範囲を凶解してくる→相互説明
3. クイズで理解度を確認する→相互・グループで解答確認
4. 応用問題に挑戦
個人思考→グループ思考→グループ交流/全体討議で理解度深化

◆教育心理学Iで体験した学び方を更に磨く:
「よりIIの方が課題が難しい」、「教科書で学んでいる方法を授業で体験している」

かっていうことを教科書を通じて学んでいくのが教育心理学IIです。全授業で予習をさせます。週1回ですがちゃんと1チャプター予習させて、それを凶解させます。凶解していきますから、他の人ののを見てもわかりません。必ず自分の言葉で説明しなければいけません。凶を相互説明させます。分かったかどうかを確認させます。共通理解をしたうえで、理解度を問う問題に挑戦させます。自分で考えて、グループで答えをみつける、あるいはグループを超えてほかのグループに解答を説明しあう場合もあるかもしれません。

こうした学びを通じて何を学んだのかを、次の授業までにまとめさせます。それをお互いに確認させて、おまえそれ間違ってる、誤解してるよねって確認させて、次の授業のウォーミングアップに代えます。こうした、予習させ、授業で理解・確認し、学んだことをまとめさせ、次の授業で再確認するというサイクルをぐるぐる回していくという形です。

もう一つ、これも教育学部の試みです。これは週1回の科目ですが、今まで授業と言うのは、特に専門教育では、必ずコンテンツ、内容を教えるためにありました。教えたい内容のために教科書を選び、その教科書の内容を教える、そしてどこまで分かったかをテストして評定し、単位認定する。これが普通です。ところが、教育学部では「学校研究」というちょっと変わった科目を作りました。これは基本的には小中学校の現場に行き学びを深めるインターンシップや教育実習の前段階で、現場体験をよ

り意義あるものにするための準備科目です。いわゆる、探究・体験型の活動をすると同時に、あるいはその前の段階として、いろいろな科目で学んでいることをつなぎ合わせて関連付け、自分なりに自分が学んだことを整理して、現場に行き何が見えてくるか考えてもらいます。あるいは現場で意識したことを大学に戻ってきたときに、いろいろな科目でばらばらに学んだものをつなぎ合わせて一度考えてみる機会にしようということです。こういった、様々な科目のハブ的な科目を作りました。ですからこの科目は、教科書があってこれを学んだら100点って話ではないんですね。ケースを使ったり、ジグソー使ったり、いろんなアクティブラーニングを体験しながら、自分たちで考えて調べて正解なんかないかもしれないけど自分なりに考えて、現場に行き現場を見てもう一回戻ってきて考えて。こういった形の科目をわざわざ2年生に組み込みました。こうすることによって、教育実習に行き初めて体験するのではなく、日頃の授業を介して実際と理論をつなぎ合わせながら学んでいくことを促します。

うとしています。というようなことを今日は本学の取り組みとしてご紹介させていただきました。ご清聴ありがとうございました。

教育学部の試み3

2年前期、週1回2単位選択必修科目「学校研究」(60名/90名前後)
←関連付けのハブ科目

学校インターンシップ参加(予定)者は必修
「アクティブラーニング体験と気づき・関連付け」が目的
特定の内容をカバーするための科目ではない

様々な既習知識との関連付けを促す課題
【教育学概論・心理学概論・教育社会学・生徒指導論・・・】
→カリキュラムの構造を意識させ、科目内容を意義づける

まさにカリキュラムでしっかりと学生を育てていきたいと思いますという形です。今日はたまたま教育学部の例ですけれども、2018年度のカリキュラム改訂では、様々な学部が、いろいろな工夫をして展開しています。ということで、高校も変わり、高校が変われば入ってくる学生も変わります。変わってきた学生に対して、創価大学は様々な形で、よりしっかりとそれぞれの高校で伸ばしてきたものを本物にしていく。このような仕事を今、全学を挙げてやろ